

筋肉弛緩反応のメカニズム

株式会社ベストエコロジー

高田整骨院カイロプラクティック研究所

1. 光とは何か

- (1) 光は電磁波の**波動性**を持つ。
- (2) 同時に光子（粒子状）の流れによる**粒子性**を持つ。

2. 電磁波と光

- (1) 全ての物質は原子からできている。
- (2) 原子は原子核と電子から成り立っている。
- (3) 電子は一定の**振動数**で振動している。
- (4) 振動している電子は、その振動で電流を発生する。（フレミングの法則）
- (5) この電流によって、磁界（磁場）が生じる。
- (6) この磁界（磁場）によって、再び電流（電場）が生じる。
- (7) この磁場と電場の発散の速度は秒速 30 万kmである。これは光の速さと同じである。
- (8) この光の速さと同じ発散を、**電磁波**と呼んでいる。
- (9) 原子内部の電子が振動することにより、光すなわち電磁波を放つ。
- (10) したがって、すべての物質から電磁波が発散しているといえる。

3. 光と細胞活性

- (1) 物質に光が当たると、一部はその物質に吸収され、残りは反射する。
- (2) 反射される光の波を人間は色として認識する。
- (3) 人間が感じる色は、特定の波長を持った光の反射であり、電磁波の一種である。
- (4) 物質は、固有の分子運動を持っており、結果として特定の電磁波(光)を吸収したり、反射したりする。
- (5) 生物細胞に電磁波(光)が吸収されると、生物の**細胞活性に変化**が生じる。
- (6) 細胞活性の変化は、神経細胞の伝達仕組みに変化を与え生体反応に変化が生じる。
- (7) 例えば、サンマに赤色の光を当てると、一斉に空中ジャンプを始めようとして海面に集まってくる。（現在は、サンマ漁は夜間に行っている）
- (8) 緑色植物は、光合成によってデンプン合成を行っている。（メカニズムは未解明）
- (9) 人間の場合、神経細胞の変化は信号として脳に伝えられ、脳は何らかの反応を示す。
- (10) その結果、**新しい生体反応**が生じることになる。

4. 分子運動と電磁波

- (1) 全ての物質は原子(分子)から成り立っており、原子(分子)は振動している。
- (2) 振動のエネルギーは、原子核のまわりに存在する電子の数や運動量によって変化する。
- (3) 原子(分子)の振動は、電磁波の発生につながる。
- (4) したがって、**全ての物質**からは固有の微弱電磁波が発生している。

5. 電磁波の対応と進化

- (1) 地球は、一定の地磁気を所有し、生命は地磁気(電磁波)の中で進化してきた。
- (2) 同時に、生命は光や地球上の物質から発生する微弱電磁波に対応して進化してきた。
- (3) 自然界の電磁波に対応できない生物は、進化の過程で滅亡していることになる。
- (4) 地球上の生物は、何らかの方法で電磁波をキャッチする方法を身につけている。
- (5) 同時に、キャッチした電磁波を判断し、**生存する為の生体反応**を身につけている。
- (6) 牛や馬などの草食動物が毒草を食べなかったり、猫やフグやゴンズイを食べないのは、その具体例である。

6. 人間の生体反応機能

- (1) 人間は、脳を高度に発達させ、進化の過程で身につけた生体反応とは別な**判断(考察)**をするようになった。
- (2) その為、環境ホルモンのような有害な物質でも食べることが発生する。時には、毒物さえ食べてしまうことが発生する。
- (3) 猫は絶対にフグを食べないが、何の説明もなければ人間はフグを食べてしまう。そして、中毒死する。
- (4) 人間は、自然界の電磁波に対応してきた生体反応より、脳の**知的判断や感性の判断**が優先するようになってきている。
- (5) 特に、面白い・楽しい・おいしい・見た目がよい・儲かるなどの知的判断は、全てに優先する生体反応示す傾向が強くなってきた。
- (6) 一方では、進化の過程で身につけた生体反応が微妙に発生している。
- (7) 本来の防御的な生体反応は、**手の指と足の裏**に一番残っていると考えられている。
(漢方およびカイロプラクティックでの考え方)
- (8) こうした生体反応機能は、脳の知的な判断とは別な反応を示している。
- (9) その一般的な反応が、拒絶反応による**筋肉弛緩**である。(筋肉のゆるみ、虚脱)
- (10) 本来、人間は発生する筋肉弛緩に対応して、有害物質や毒物を食べないようにしてきた。
- (11) 更に、放射線や強力な電磁波などの危険な状態から逃避できるようにしてきた。

7. 筋肉弛緩

- (1) 骨格を支える横紋筋(骨格筋)の筋肉弛緩は、人差し指の筋力によって判断することが可能である。
- (2) 内臓を構成する平滑筋の筋肉弛緩は、薬指の筋力によって判断することが可能である。
- (3) 生命の根源を維持している内臓に対する毒性は、薬指の反応で判断することが可能ということになる。
- (4) こうした反応を漢方で薬草の判断に利用したことから、「薬指」と呼ばれるようになったとされている。
- (5) 人間に対する毒性の問題は、利用（食べる）する期間や量によって変化する。
- (6) 短期利用（食）の毒性、長期利用（食）の毒性、副作用などに対して、薬指は微妙に反応する。
- (7) こうした薬指の反応に対し、西洋医学を中心とする現代科学では、否定的な判断をされることが多い。
- (8) 筋肉弛緩という生体反応は人間が身につけている最も大切な拒絶反応である。
- (9) 指の筋肉弛緩は、身体全体の横紋筋・平滑筋でも発生を示しており、「身を守る』本来の生体反応と受け止めることができる。
- (10) 特に薬指での筋肉弛緩反応は、今後の脳科学における重要な研究テーマである。

(脳波測定記録参考)

注)

- ① 筋肉弛緩反応は、一般的に言われている指の筋力によるOリングテストとは異なった見解である。特に、横紋筋（人差し指）と平滑筋（薬指）の反応は区別して判断しなければならない。
- ② 生体反応と電磁波理論に関しては、ホームページの「企業内論文」を参考に。
(<http://www.b-eco.com>)